

〔同じ鉄骨検査なのになぜ費用に差が生じるのか、そのカラクリを分析した意見書〕

大手設計事務所がからむ公共物件では普通に受入検査が求められる、費用的にもゼネコンからそう無理な要求はされない。当然のように、告示1464号の検査も行われ、品質管理は全体に行き渡る。

民間物件では規模にかかわらず、それが大手ゼネコンであっても費用優先であり、鉄骨の品質確保は二の次になる。そもそも受入検査は規格規

準、仕様書などで手法が決められているため、必要な費用に大

OPINION I
鉄骨検査費用に差がつくカラクリ
検査データ流用から「天ぷら」まで

通常と比べて報告書上で同じ抜き取り率、抜き取り数であって

では日頃、社内検査を行って

と呼ばれるもので、送られてきた図面で報告書を作成する。ケース1、2、3に染まっ

ては日頃、社内検査を行って
いる検査会社が受入検査の報告書を書くので大安心である。
ケース2 普通、鉄骨の受入検査は製品完成後に行うが、柱が大組みされておらずパネルの状態でもロットに含めて受入検査を行う。例えば、柱5台でロットを構成できる場合、完成品2台、パネルのみ3台の状態で抜き取り検査を行えば、検査日数を少なくできるが、未溶接個所の品質はまったく保証できない。1回

受入検査が入れば、未溶接部
上記の4つのケースでは、

差が生じないはずである。ところが、実情は大きな費用の

まで含めてロット合格となる。ケース3 さらに、ロット

も、各製品に対する品質および検査日数には大きな差が生

差が見られる。なぜなのか調べる、提出された検査報告書では判断しづらいが、以下のケースが認められた。

ケース1 1つの組織が2つの会社名を持ち、社内検査と第三者検査の両方を行って

柱だけでそのロットの全ての抜き取り検査が実施された報告書を作成する。姿の見えない柱の品質は100%ファブ

のまま受入検査のデータとなり、合格個所のみ記述となる。不合格個所の補修が行われるかは疑問。ファブにとつ

ケース4 究極は「天ぷら」

下請けのファブで製作され、無検査でそのまま現場に搬送されても分らない。

まかせとなる。例えば、2次

1年間でも事後の噂がたえず

流れており、鉄骨の品質管理は絵に描いた餅と思わざるを得ない。

ケース4 究極は「天ぷら」

施工不在が現実である。